大切な人にプレゼントしたい本リスト



books 電線の鳥⑤

『書庫に水鳥がいなかった日のこと』

小津　夜景／著　素粒社

ぶらんこの木の下で心はまだ揺れている
帰ろうとしてもその場を離れられない
嵯峨天皇「鞦韆篇」

南仏ニースと京都の二拠点で活動する俳人、小津夜景の漢詩エッセイ最新作です。漢詩エッセイとしての前作となる『いつかたこぶねになる日』（同、2020）は、読書界に静かな熱狂を呼び、のちに新潮文庫に入りました。

高校で習った漢文のイメージを引きずっていると、紹介されている漢詩の親しみやすさに驚くでしょう。壮大な主題もありますが、（肉食が禁じられた時代に）豚肉を食べる喜びなど、暮らしの一場面も歌われています。

本書は、漢詩の解説書ではありません。俳人らしく、漢詩と絶妙な距離で語られるエピソードは、ほんの少し現実から宙に浮いたようで、適度にディレッタントです。そして漢字の持つ、意味とイメージの凝縮力たるや。一語一語がその都度スパークし、香気を放つかのようです。



Book store 松本本箱

『100年の旅』

ハイケ・フォーラ／文
ヴァレリオ・ヴィダリ/イラスト　前田まゆみ/訳
かんき出版

人間の０歳から１００歳までの人生を、一歳ずつ、旅のように、詩のように紡ぐ絵本。

読む人それぞれの年齢や経験、そして今まで何を大事にして生きてきたかで、印象に残るページは違うだろう。

それは一杯のコーヒーでほっと一息つく時間かもしれない。
それは一匙のブラックベリージャムの味かもしれない。それは一匹の蝶を見た時の驚きかもしれない。
人と人が出会って、生きて、愛することの喜びや、ふっとそばにある死や別れの予感、一人の孤独や悲しみがぎゅっと詰まった一冊。

大切な人にプレゼントしたい本リスト



boccabooks①

『100年の旅』

ハイケ・フォーラ／文
ヴァレリオ・ヴィダリ/イラスト　前田まゆみ/訳
かんき出版

私の100年の旅は、もう随分前に折り返し地点を過ぎました。
何歳のときに、何があったのか、そんな記憶が少しずつ曖昧になってきた自分にとって、この本は、一年一年が一粒一粒、大切な時間だったことを思い出させてくれる一冊です。

1歳につき1ページ。温かみのある絵とともに、その年齢で起こりそうな出来事や、心の動きが短い言葉で綴られています。
言葉が少ないからこそ、読む人それぞれの記憶や思いが重なって、心に静かに染み入ってくるのだと思います。

大切な人にも、自分の一年一年をゆっくり振り返る時間を持ってもらえたらいいな。そんな思いを込めて、贈りたくなる本です。



boccabooks②

センス・オブ・ワンダー

レイチェル・カーソン/著　上遠恵子/訳
新潮社

人生を振り返ることで、自分が見てきた世界に思いを馳せたあと、今度はもう一度、目の前の世界を見つめ直してみる。眠っていた自分のセンサーが静かに再起動して、いつもの風景の中にある驚きや美しさを、あらためて感じ取れるのではないかと思います。

今回、再読して、最後の方に綴られた言葉に慰められました。自然の中に、人間を超えた存在を感じる力があれば、苦難の中にあっても、満ち足りた気持ちを得ることができる――そんな趣旨の言葉です。次の休みには、ぜひ里山か公園へ行こう。心からそう思いました。

この本では、子どもと自然について多く語られています。でも、目の前にある自然をよく見ることは、大人にとってこそ難しく、そして必要なことなのではないでしょうか。
時代が変わっても古びることのないこの本を、大切な人と共有できたらと思います。

大切な人にプレゼントしたい本リスト



boccabooks③

サキサキ　オノマトペの短歌

穂村　弘／編　高畠　那生/絵

岩崎書店

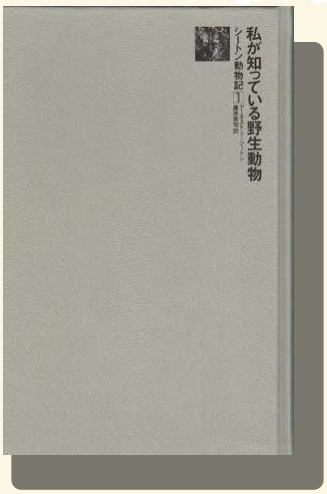
　気がふさぐような一日だったなら、寝る前にちょっとこの本を開いてみてほしい。そんなふうに思う一冊です。

　見開き3ページを使って、オノマトペが印象的な短歌一首を、大胆な色使いの、ちょっとシュールなイラストとともに紹介しています。本からはみ出してくるような絵の大きさに、いつのまにか不思議な世界に入り込んでしまいそう。

　一緒に載っている穂村さんの解説は、こちらの予想をちょっと裏切るようなものばかり。思わず肩の力が抜けて、「まあ、いいか」と思えてくるのです。

大切な人の今日一日が、穏やかなものであってほしいから。

　そんな願いを込めて、贈りたくなる本です。



丸善（松本店）①

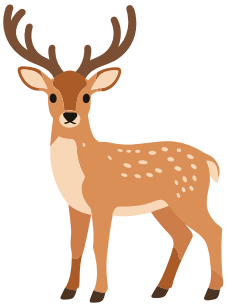
『シートン動物記』

アーネスト・T.シートン／著　藤原　英司／訳

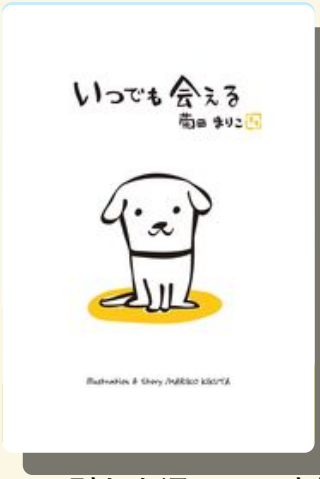
集英社

　博物学者シートンが見聞きしたものと創作をかけ合わせた物語シリーズ。家で暮らすペットや動物園のいきものたちとは全く異なる、厳しい環境で生きる動物たち。その生き様は決してかわいい/かっこいいだけのものではなく、しかしエンタメ化された残酷さとも異なる、生々しい現実感を伴う「生命」を教えてくれます。リアルな挿絵がまた、良い。

　名前を知っていても読んだことがないという人も多いので、本をプレゼントする機会があれば積極的に選んでいる一冊です。



大切な人にプレゼントしたい本リスト



丸善（松本店）②

『いつでも会える』

菊田　まりこ／著　白泉社

初めて大切な人に贈った本です。小学6年生の卒業式を数日後に控えた日、父親の転勤で遠くの中学校に通うことになったわたしは、仲の良かった友達にこの本を贈りました。犬のシロが大好きなみきちゃんとの別れを通して、大切な人への想いに気づいていく物語です。わたしは死ぬわけではないけれど、遠くへ行ってしまう。それでもシロとみきちゃんのように目を閉じれば近くに感じられるのだと、だからずっと友だちでいたいのだと、拙い手紙を添えました。あれからずいぶん経ち、二度と会えない別れや耐えがたい別れも経験しました。そのたびにこの本を思い出します。大切な人との別れを経験した人にも、今そばにいる大切な人にも、手に取ってほしい一冊です。



丸善（松本店）③

『こころ』

夏目漱石／著　新潮文庫

大切な人には、美しく綺麗な世界で生きていて欲しいと思う。
でも現実はそうはいかない。もし自分に中に汚い部分を見つけてしまった時、この本を読んでみて欲しい。
『こころ』は、「私」を主体に、先生・先生の奥さん・Kの4人で物語が進んでいく。決して派手ではない、モノクロームの映画のような物語だ。澱のように、静けさの中に沈殿している美しくない人間臭さが時折顔を出して、その度に綺麗なだけでは生きていけないのだと思わされる。
時代背景を鑑みると、現代に生きる今の人には共感しづらい部分も多々あるかと思うが、人間の本質は、良くも悪くもいつの時代もさほど変わらない事が分かる。
其々が選んだ道が正解なのかは分からないが、この物語への分析は無粋でしかない。ただ、そう在っただけなのだ。

大切な人にプレゼントしたい本リスト

本・中川

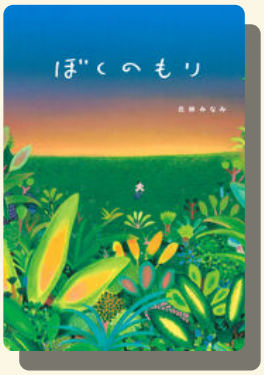
憂いごとの絶えない日々です。
なんとも厳しく、目まぐるしい時代になったものだと感じます。
政治、経済、国際情勢、デジタル化、システム化、多種多様な社会問題……
この同じ時代を生きるすべての人々を「大切な人」として、「生きる」上で大切にしたいことが書かれている本を3冊選んでみました。どの本も優しく自然な言葉で語りかけてくれます。ずっと昔から変わらない、普遍的なことではありますが、改めてその大切さを再認識してみるのはどうでしょうか。「生きる」と「生活」の間には少し距離があります。
目の前の「生活」のことに疲れてしまったとき、「生きる」根っこの部分に栄養を注いでくれるような本を選んでみましたので、たくさんの人に届いたらいいな、と願います。
厳しい時代ではありますが、本はまだまだ私たちのそばにいてくれます。



『ほんとうの私たち』

M.B.ゴフスタイン／著　トンカチブックス

1979年にアメリカで出版されたゴフスタインの『NATURAL HISTORY』は、その後1990年に日本で谷川俊太郎さんの訳で『生きとし生けるもの』として出版され、その後絶版となっていました。
その後2021年に新訳新装版として出版されたのが、この『ほんとうの私たち』です。長く、読み継がれてゆきますように。



『ぼくのもり』

北林　みなみ／作　講談社

幼少期に海外で過ごし、疎外感や孤独感を抱えていた北林さんは、自身の内面に広がる風景を描き続けています。こんなに美しい「ぼくのもり」が、きっと誰の胸の内にも存在しているはず。
そのことに気が付いたり、思い出してもらえますように。



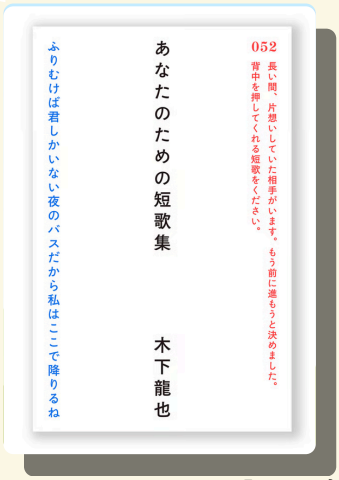
『白い火、ともして』

西尾　勝彦／著　七月堂

※この本は図書館には所蔵がありません。

詩人で国語教師の西尾さん。若い人たちに向けて「創作基礎講座」を開き、その内容を随筆詩の形でまとめた一冊です。と言っても、教科書のような本ではありません。「芸術」は特別な人だけがやることではなく、どんな人にも自分の考えや表現があるはず。自分の内面と素直に向き合ってみると、やりたいことや、誰かに伝えたいことがふわっと表れてくるかもしれません。

大切な人にプレゼントしたい本リスト



未来屋書店（松本店）

『あなたのための短歌集』

木下　龍也／著　ナナロク社

歌人・木下龍也さんが、個人から寄せられた「お題」に応えて生まれた100題100首を厳選した短歌集。

ここに収められているのは、誰かひとりの切実な想いや日常から立ち上がった、まさに「その人のためだけ」の短歌です。自分宛てに詠まれた言葉ではないはずなのに、ページをめくるたび、なぜか自分の記憶や感情に重なり、静かに心へ染み込んでいきます。

誰かの想いに寄り添ってきた言葉たちは、読む人それぞれの心の中にある優しさや傷にも、そっと手を差し伸べてくれるはず。

大切な方へのプレゼントにはもちろん、自分自身へも贈りたくなる特別な１冊です。

「あなた」や「あなたの大切な人」の心に寄り添う、かけがえのない１首が見つかりますように。





むこうみね書店①

『きょうはなんのひ?』

瀬田　貞二／作　福音館書店

朝学校へ行く前に、小学生のまみこがお母さんに残した「きょうはなんのひだか、しってるの？……しらなきゃかいだん３だんめ」という言葉。階段には1枚の手紙が置いてありました。 そこから次の手紙、また次の手紙へと、ヒントをたよりに、おかあさんの宝探しのような一日がはじまります。

家の中に仕掛けられた手紙を、絵本の中でいっしょにたどるのが楽しくて、小さい頃に何度も読んだ（読んでもらった）覚えがあります。

感謝をこめて、こっそり用意された贈り物の愛おしさ。

記念日はもちろん、「きょう」という日　が特別に感じられる、大切な人に贈りたい一冊です。

大切な人にプレゼントしたい本リスト



むこうみね書店②

『日々の暮し方』
別役　実／著　白水社

「正しい散歩の仕方」から「正しいお別れの仕方」「正しい電信柱の登り方」、さらには「正しい誘拐の仕方」まで。

一見すると丁寧な生活を促す啓発書のようでありながら、日常のあらゆる作法を、劇作家・別役実が独自のロジックとユーモアで解説する異色のエッセイ集。

ページをめくるたびに広がるナンセンスな世界観によって、「日々」の枠組みが音をたてて崩れていきます。一体、この本をどう正しく読めばよいのか・・・この本に対してはそんな疑問さえ不毛かもしれません。

帯には「不安と困惑の日々を過ごす人に対して・・・」との言葉。世の中の「当たり前」に疲れ「正しさ」を前に立ちすくむ方がいれば（それは自分かもしれませんが）、そっと贈りたい一冊です。



中央図書館

『きみのことがだいすき』
いぬい　さえこ／著　パイ　インターナショナル

子どもが小さいときにプレゼントして読んであげたかった本です。
優しい言葉や可愛らしい絵はやさぐれた私の心に突き刺さります。
「よく頑張っているね」と全肯定してくれ、励ましてくれます。
この本のほかに『きみのそばにいるよ』、『きみとぎゅっ』のシリーズがあり、どれも心温まります。疲れた心に沁みること間違いなし☆彡



大切な人にプレゼントしたい本リスト



中央図書館

『大切に抱きしめたい お守りのことば』
松浦　弥太郎／著　リベラル社

家族からプレゼントしてもらった本です。ていねいな生き方を重ねてきた著者が贈る155の言葉が記されています。記されている言葉は基本的なことではありますが、忙しない日々の中で忘れてしまいそうになってしまうものでもあります。
自分自身を見つめなおしたいときや、心が疲れたときに読み返したい1冊です。
あなたの心に寄り添う「お守りのことば」が見つかるかもしれません。



本郷図書館

『これが生活なのかしらん』
小原　晩／著　大和書房

著者の小原晩さんが、日常のなかであったこと、感じたことなどがありのままに、やわらかな文章で綴られているエッセイです。
大切な人には、せわしなく過ぎていく毎日のなかでいったん立ち止まって自分のことを見つめなおす時間も持ってほしいと思い、この本を選びました。
著者の視点を通して自分の生活をみつめなおしてみると、きらりと光る人生の「ほのおかしさ」に気づかされるかもしれません。



大切な人にプレゼントしたい本リスト



本郷図書館

『ＢＵＴＴＥＲ』

柚木　麻子／著

実際に起きた事件をモチーフにした小説が世界で絶賛され、特にイギリスの文学賞をいくつも受賞しているという記事を目にし、何が世界の人々を引き付けるのか興味を持ち読んだ本です。
事件の真相を追う女性記者が、男たちを惑わす、多くの人が女性にいだく固定観念とは逆の容疑者との面会を重ねるたびに記者の内面も外観も変貌し、周りの人たちの運命も変えていく心理描写が魅力で、ジェンダーや無意識の偏見を理解してもらいたい大切な人に送りたい作品です。

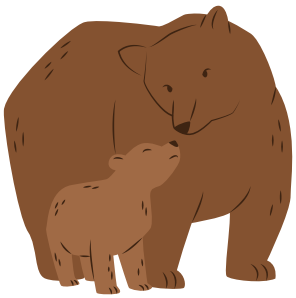


中山文庫

『超危険！最恐クマのすべて』

別冊宝島編集部／編　宝島社

登山の友達は、かけがえのない大切な仲間である。
近年、クマによる被害が相次ぎ、ニュースで取り上げられる機会も増えている。被害は、登山や山菜採りといった山中だけにとどまらず、人の暮らしの場へと踏み込んできている。このような状況なので、山仲間が登山中にクマと遭遇する確率も高い。
そこで、万が一クマと“バッタリ遭遇”してしまった場合の正しい対処法を紹介しているこの本を山仲間にプレゼントしたい。クマ遭遇時の後退の方法、熊スプレーの使い方、防御姿勢等々、詳しく説明されている。最悪の事態を避けるために、しっかり身に着けてほしい。



大切な人にプレゼントしたい本リスト



島内図書館

『旅猫リポート』

有川　浩／著　文藝春秋

猫好きなら絶対読んだほうがいいと言われ図書館で借りて読みました。猫目線で話がすすみます。途中からラストまでの展開がよめますが止められず一気に読んで、次の日書店で買いました。悲しいけれど、猫と飼い主との関係性や飼い主と周囲の人との関係性などのエピソードが素敵で、大切な人に贈りたいとても心温まる作品です。





空港図書館

『おでかけ料理人 佐菜とおばあさまの物語』

中島　久枝／著　文藝春秋

おいしい料理を作りに赴くおでかけ料理人の佐菜。
様々な人とのふれあいで内気な性格の佐菜は成長していきます。
誰かを想いながら作る料理のあたたかさが溢れる物語なので
大切な人にも読んでもらいたくなります。